

平成二十九年 度 金沢学院短期大学 入学試験問題 (一般入試Ⅲ期)

国 語

(注意事項)

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから18ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

(解答上の注意)

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10

と表示のある問いに対して

④と解答する時は、下記の(例)のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

(例)

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～8）に答えよ。

自分で自分の書いた日記を読み返し、そこに描かれている「私」の姿にとまどいや自己嫌悪を感じた経験はないだろうか。

描かれている「私」はたしかに自分であるはずなのだけれども、まるで別人のようにも感じられる。いつそ赤の他人ならよいのだろうが、一見異なる人物が実はほかならぬこの自分自身でもある、という二重感覚がわれわれをとまどわせ、羞恥や嫌悪の引き金になるのである。

いや、こうした言い方はあまり正確ではないかもしれない。たとえば写真で過去の自分の姿を見た時、われわれが感じるのは羞恥や嫌悪よりも、（ a ）「こんな自分もいたのだ」というおかしみや懐かしさである。画像が外面的、形態的な客観性を保持しているのに対し、日記は言葉で書かれているために、本来外にさらされることのないはずの「内面」を①ロテイしてしまっている。そのためわれわれは勝手な「内面」づくりにいそしんでいた、まさにその行為にいたたまれなさを感じるのだ。

日記に登場する「私」は実にさまざまだ。友人と喧嘩けんかしたときの記述は自分が都合よく正当化されてしまっているかもしれないし、失恋したときの記述はこの世の悲劇を一身に背負ったヒーロー、（ b ）ヒロインになってしまっていることだろう。その時々②ヨウセイに従ってフィクションに仮構された「内面」が、今、読み返している「私」と同一であることを強いられるがゆえに、われわれはいわく言いがたい羞恥と嫌悪を感じてしまうのである。

（ c ）右の事情は、実は言語芸術である「文学」とは本来いかなるものなのか、という秘密を③如実に解き明かしてくれているように思われる。

密室の芸術である小説は、人間が内奥に抱えている秘密をひそかにささやきかけてくれる。「ささやき」を行っているのは叙述に潜在している表現主体なのだが、この隠れた「私」は、秘密を④臆面もなく暴露していることにもなう自負や⑤銜くはい、あるいは気恥ずかしさと向き合わなければならぬ。このひそかな葛藤がどのように処理されているかが、実はその小説を読み解く重要な勘所の一つなのだ。いつそ、「私」など最初からないかのようにフィクションな客観世界を自立させ、淡々と報告していくやり過あやまりし方もあるのだろう。しかしどうにもごまかしがきかなくなってしまうのは、「私」が「私」自身の見聞や体験を直接の題材にしている場合である。この時「私」は「内面」づくりにいそしもうとする自分に否応なく向き合わされ、読者に対して「描く私」をいかにふるまってみせるかという、過酷な課題を突きつけられることになるのである。

初めて小説を書いてみようと思いついた時、多くの人はまず自分の体験を一人称の「私」で素朴に綴ることから始めてみることだろう。（ c ）

実際に書き始めてみると予想以上に困難なことに気がつき、多くの場合、途中でペンを放り出してしまうことになる。^③ケンシヨウ小説の応募作に多いのは中高年の人々が自身の体験談を素朴に綴った「自分史」である。聞いたことがあるが、^④実は「自分史」と「小説」とは似て非なるものなのだ。仕事の困難を克服した体験など、一つ一つは胸を打つワヘイではあっても、実はそれ自体は「小説」ではなく、ノンフィクション等のジャンルでも充分に対応できるものなのである。それが「小説」になるかどうかはひとえに「描く私」の「よそおい」をどのようにつくっていくかにかかっている。体験を得々と自慢している姿が背後に透けて見えてしまうようなら論外だし、反省や自責の念一辺倒でも、自虐的な「良心」の押し売りとして反発を招くことになるだろう。「描く私」のみぶりはいわばそれ自体が一個のパフォーマンスなのであって、^⑤「描かれる私」をつくる主体として読者にいかに「私」を演出していくかという、その演技の舞台こそが小説空間なのである。

近代小説はこうした「描く私」の演技性に作者たちが気づき、時に大胆な失敗をくりかえしながらも^⑥カカンなチャレンジをくりかえしてきた歴史でもあった。小説家をしてかくも危険なカケに身を投じさせてきた一人称小説の魅力とは、そもそもいかなるものだったのだろうか。

一人称小説の最大の利点はなんといってもまず、「当事者のリアリティ」にある。事件に直接かかわった本人が事実をそのまま語ってくれている、という迫真性である。ただしこの場合、^⑦「事実をそのまま」という点には慎重な留保が必要だろう。ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』（一八七〇年）にせよ、^⑧漱石の『吾輩は猫である』にせよ、われわれはまさか本気で海底に別世界があると考えているわけではないし、猫が人間の言葉をしゃべると信じているわけでもない。問題は内容や語りが「事実」かどうかではなく、当事者の証言である、という臨場感にこそあるわけである。

これを逆に言えば、一人称は非現実的な内容にリアリティを与えたり、ありきたりの日常を眺め変えてみたりするためにこそ有効な手立てでもある、ということになる。一人称小説、と言うと、われわれはともすれば実生活の内容をありのままに告白する、というスタイルを連想しがちだが、長い歴史の中ではそれはむしろ特殊な形態なのであって、個人の「内面」の「告白」、という考え方が主流になるのは、近代のロマン主義が「個の獨創性」を声高らかに宣言して以降のことなのだった。むしろ一見信じがたい「事実」を伝聞として、まことしやかに語っていく形態の方が、一人称小説本来のあり方だったかもしれないのである。

(d) シャーロック・ホームズを語るワトソンを想定してみることにしよう。仮にシャーロック・ホームズ自身が直接事件を語ったならば、直感や飛躍の多い、^⑨獨善的な内容になってしまうにちがいない。かといって客観的な三人称小説の形をとったなら、平板な叙述に終始してしまう

ことだろう。事件を直接知る立場にありながら「伝聞」に徹するワトソンの語りによって、シャーロック・ホームズの言動をある程度客観的に浮き彫りにすることが可能になる。一方でまた、身近にいる人間の証言として、臨場感を打ち出すこともできるわけである。

(安藤宏『「私」をつくる―近代小説の試み』による。一部改変。)

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

① ロテ|イ

① 企業間でテ|イケイする。 ② 敵陣をテ|イサツする。

④ 文学賞をゾウテ|イする。 ⑤ 条約をテ|イケツする。

② ヨウセ|イ

① 国民のセイ|ガン権。 ② 栄枯セ|イスイの歴史。

④ 石油をセイ|セイする。 ⑤ 喧嘩両セ|イバイ。

③ ケンシ|ョウ

① ケン|メイな判断だった。 ② 鉄棒でケン|スイする。

④ ケン|ゴな守り。 ⑤ 勝利にコウ|ケンする。

③ お互いのケン|トウをたたえる。

④ ワヘイ 4

① 二種類の薬をヘイヨウする。

② 長時間労働で社員がヒヘイする。

③ 難問だらけの試験にヘイコウする。

④ ヘイソからの協力に感謝する。

⑤ オウヘイな態度に腹を立てる。

⑤ カカン 5

① カモクな男性。

② 話がカキヨウに入る。

③ カジュエンを経営する。

④ 責任を他人にテンカする。

⑤ キンカギョクジョウのごとく尊ぶ。

問2 空欄（ a ）（ b ）（ c ）（ d ）に入る語としてそれぞれ最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は a 6、b 7、c 8、d 9。

① しかし

② なぜなら

③ むしろ

④ たとえば

⑤ あるいは

問3 傍線部（ア）「右の事情」とあるが、この内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 10。

① 日記の中の「私」は、常に過去の時点の「私」であり、読み返している今の「私」と、すべてが一致することはないということ。

② 日記を書いているときには気づかないが、読み返してみると、「私」はひとつではなく、場面に応じて多様な姿を示しているということ。

③ 写真と違って日記は記述に客観性がないが、そのためにその時々をの思いを何の制約もなく自由に書き残すことができるということ。

④ 日記は主観的なものであり、真実かどうかではなく、「私」の感じ方・見方のリアリティがその文学的な質を左右するということ。

⑤ 日記に書かれた「私」は、真実の「私」ではなく、書き手の「私」が物語の主人公のように創りあげたものであるということ。

問4 傍線部(イ)「如実に」、(ウ)「臆面もなく」、(エ)「銜い」、(ケ)「独善的な」の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の各群の

①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

(イ) 如実に

- ① ありのままに明解に
- ② 論理的に筋道立てて
- ③ 科学的に詳細に
- ④ 言葉ではなく感覚的に
- ⑤ 粘り強く丹念に

(ウ) 臆面もなく

- ① 確固とした意志もなく
- ② 遠慮する様子もなく
- ③ 手加減することもなく
- ④ 思慮深い様子もなく
- ⑤ 愛想をふりまくこともなく

(エ) 銜い

- ① 高揚した気持ち
- ② 他人の目を気にする意識
- ③ 無邪気さを装いたくなる気持ち
- ④ 自分をひけらかしたい気持ち
- ⑤ 他人と比較しようとする意識

(ケ) 独善的な

- ① 抒情的な
- ② 緊張感がみなぎった
- ③ 自己中心的な
- ④ 矛盾だらけの
- ⑤ 他人にはまねできない

問5 傍線部(オ)「実は「自分史」と「小説」とは似て非なるものなのだ」とあるが、その理由として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 「自分史」は「小説」と違って、体験を語る「私」も、作者によって創られた存在であるという意識がないから。
- ② 「自分史」は「小説」と違って、一人称の「私」でしか語れないために、話がどうしても一面的になってしまうから。
- ③ 「自分史」は「小説」と違って、面白く語る技術がないかわり、体験したものにしか書けないリアリティがあるから。
- ④ 「自分史」は「小説」と違って、読者を強く意識するあまりに、必要以上に話を面白くしようとして不自然な展開になるから。
- ⑤ 「自分史」は「小説」と違って、自分自身が実際に体験したことだけを語るために、物語としての面白さがあまりないから。

問6 傍線部(カ)「描かれる私」をつくる主体」とは何か。最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 「私」の話を読んで「私」という人間を想像している読み手。
- ② 「私」の話を作っている作者とそれを読んでいる読み手。
- ③ 「私」の話を自ら読んだときの作者自身の自意識。
- ④ 「私」の話を読み手に受け入れられるようにふるまう語り手。
- ⑤ 小説のなかの「私」と真実の「私」とを論理的に区別する知性。

問7 傍線部(キ)「事実をそのまま」という点には慎重な留保が必要だろう」とあるが、その理由として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 日常では見えない「事実」を発見する方法を論じるから。
- ② 虚構の世界における「事実」らしさを問題にするから。
- ③ ひとが「事実」と認識するときの根拠は曖昧なものだから。
- ④ 語り手の語り方によって読者の感じ方が違うから。
- ⑤ 見る人によって見え方が異なってしまうから。

問8 傍線部(ク)「漱石」とあるが、次の①～⑤の作品の中で、夏目漱石の作品ではないものを一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 『坊っちゃん』
- ② 『三四郎』
- ③ 『明暗』
- ④ 『人間失格』
- ⑤ 『こころ』

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

小学四年生の「すみ夫」は、中学一年の「首領」が率いる少年グループの最年少で、「ペック」と呼ばれている。このグループには、ある任務を果たし仲間として認められると、「注」半太夫」などの忍者名がもらえるとというきまりがあった。

「びくびくするねえ」

と、歩きながら半太夫が言った。

「おめえ、顔があおいぜ」

「青くなんかないよ」

と、ペックは言った。

「平気か？」

「平気だよ」

「よし、それじゃあな、金槌かなづちをとれ」

「金槌？」

「売り場の奥に大工の道具を売ってるところがある。大工道具は必要だからな。まあ、金槌でおきてをすましてやる。そのほかにとれたら、讚ほめてやるよ」

半太夫はペックに四角く畳んだ千円札を手渡した。

「これはおめえにやるんじゃないぞ。万一の場合にだぞ。万一、見つかったら、仕様がなから買ってしまふんだ。これはみんな、首領の（a）お慈おひさ悲あはれだぞ。どじを踏むような奴は、仲間に入れておけねえんだ、ほんとは」

ペックは半太夫の言葉を上の空で聞きながら、その頭は目まぐるしく回転していた。

ふしぎに、恐れはなかった。万引なんて、なんでもないことなのだ。人間には隙がある。その隙をつくことが忍法なのだ。たとえば白布を投げる。

敵の忍者がその布に気を奪われた一瞬に、影丸は別の木にとび移る。まして相手は忍者ではなく、(b)ほんくらな店員なのだ。

また忍者は(c)裏の裏もかかねばならぬ。自分はその金槌の前に行ったら、目にもとまらぬほどすばやくそれを買ひ物袋の中へ(ナベ)こませるような幼稚なことはすまい。そういう慌しい動作には(d)破綻が伴うし、どこに誰の目が光っているかもわからないからだ。

自分は金槌を手にとつたら、それをゆつくりと持って、(注)帳場をさがすようなふりをして周囲を確かめよう。それから安全を確かめて、何歩か歩きながら、やはりゆつくりと、ごく自然に袋の中へ落としこもう。それで一つの術は完成する。自分はおきてを果たし、準隊員の名簿にのる。

大通りへ出、スーパー・マーケットが見えてきてからも、ペックの足取りは変わらなかった。心臓だけが早目にうちだしたが、それは不安というより期待と決意のためだった。

マーケットの前は、駐車した車——その多くは小型トラックだった——と人波でこつた返していた。店の前の右手に、十円を入れるとうごく馬や象の乗り物があつて、二、三人の幼児が乗せてもらつていた。三歳ばかりの醜い男の子が、齒をむきだしにしてこちらを見て笑つた。(イ)ペックは一瞬、その男の子に笑い返したいような気さえした。(中略)

両手に買ひ物袋をかかえて凄(すじ)い勢いでやつてくる肥(ふと)った男を、ペックはぶつからずにあやうくすりぬけた。

「忍法、変わり身」

と、彼は心のうちで呟(つぶや)いた。

ペックのたかぶつた心には、いささかの渋滞もなかった。不安も危懼(きぐ)もなかった。危険の予感(よかん)は、一途の気負いの中に吸いとられた。今はうまうまと築城中の敵の仕事場へはいりこんだ。行き交う武士、人夫らは自分が隠密であることを知らぬ。

目ざす大工用品はもつとも店の奥にあつた。通路をへだてて、椅子のたぐいが商(あ)われている。

木の枘(ますがた)型の売り台があつて、その中に釘、かすがい、滑車、ねじまわし、鋸(のこぎり)から鉋(かんな)までが並べてあつた。ぴかぴかと真新しい釘の群れ、どぎつい鋸の刃のいろが目を射た。

ペックの家にも箱一杯の大工道具がある。しかし、それらはいずれも錆(さび)ついたり燻(くす)んだりしていて、いま目の前にある同類とは似ても似つかなかつた。意外に目新しい、ほとんど豪奢(こうしゃ)とまで感じられる鉄のにぶい光。

はじめて（e）逡巡が、疑いが、ペックの胸を貫いた。

もう周囲をうかがう余裕がなかった。彼は一本の金槌を手にとった。それがずっしりと重く、まがいようもなく現実の重みがし、（ウ）こんな痛いような重量はかつて知らなかったように思われた。《

それでもペックは必死に心に唱えようとした。

「忍法……金槌」

それでは意味をなさなかった。

突然襲ってきた虚脱感、もはや何かを行おうとする気力がなかった。

それでも彼の肉体は、それまでずっと計画をねっていたことと近似の行動をした。ペックの汗ばんだ手は金槌を握り、他人のものとも思える足は少しづつ一方へ歩きだしていた。

彼のおびえた目は何者かをさがした。それがどこにも見当たらない。

客の背がペックを押しした。彼は少しよろけ、自然と金槌を持った手が下がった。それは売り場よりも低くなり、しかも彼の動作に気づいた者などあり得なかった。そのまま金槌を袋に落としこめば何もかも済んでしまう。

だがペックは、ふたたび金槌を差しあげるようにした。その目がけんめいにあちこちをまさぐった。しかし彼の視界に映ずるのは、おびただしい客の群れと無数の商品の波ばかり。（エ）恐ろしい空白。

ようやく店員らしい姿が目映った。ペックはよろよろと、人波をかきわけてその前に辿りついた。

「これ、下さい」

そして、もう一方の手で、小さく畳まれた千円札を呆けたように取りだした。

（北杜夫『天井裏の子供たち』による。一部改変。）

（注） 1 半太夫——一九六一年から「少年サンデー」に連載された横山光輝の漫画『伊賀の影丸』の登場人物。催眠術を用いる忍者。

2 帳場——支払いをする所。

問1 点線部(a)～(e)の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は ～ 。

(a) お慈悲

- ① ご鼻^{ひじき}眞
- ② ご親切
- ③ お情け
- ④ お目こぼし
- ⑤ ご配慮

(b) ぼんくらな

- ① おっとりした
- ② 気が利かない
- ③ 間拔けな
- ④ 怠け者の
- ⑤ 平凡な

(c) 裏の裏もかかねば

- ① 決して本心を知られては
- ② 心にもないことを常に言わねば
- ③ いつもとは逆の出方をしなくては
- ④ 相手の予想を徹底的にくつがえさねば
- ⑤ 公言できない汚い手を使っても勝たねば

(d) 破綻

- ① 混乱
- ② 失敗
- ③ 崩壊
- ④ 悲劇
- ⑤ 墮落

(e) 逡巡

- ① 気おくれ
- ② 心配
- ③ 後悔
- ④ 苦悩
- ⑤ ためらい

問2 傍線部(ア)「その頭は目まぐるしく回転していた」とあるが、この時の「ペック」の心情説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 万引きという犯罪に手を染めるはめになり動揺を禁じ得なかったが、なんとか自分をごまかし今後を目を向けようと努めている。
- ② 自分を信用しない半太夫の恩着せがましい言葉を疎ましく思いながらも、これから行う冒険にスリルを感じ、心を躍らせている。
- ③ 忍者の術の段取りを考えるとともに、首尾よくそれをやり遂げて認められたいと、身が引き締まるような緊張を覚えている。
- ④ 予想したよりも首領の与えた任務が難しくなかつたので、ひとまず安心し、これから踏むべき手順を一つ一つ冷静に考えている。
- ⑤ 店員を相手に、自分の術をどのように完成させそれを半太夫に見せつけようかと、想定される事態を様々に思い描いている。

問3 傍線部(イ)「ペックは一瞬、その男の子に笑い返したいような気さえした」とあるが、なぜそのように感じたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 店の前の乗り物で遊ぶ男の子の様子がいかにも無邪気であったため、悪事を行う自分と比べてその姿がほほえましく感じられたから。
- ② なりふり構わず遊具に夢中になる男の子の姿に、今は捨ててしまった、以前の自分の幼さを感じ、男の子に優越感を抱いたから。
- ③ 男の子の無防備な笑顔によって、余裕のない現在の自分の状態を意識させられ、せめて人に笑いかけるゆとりが欲しいと思ったから。
- ④ 普段は気にも留めないような、他人の醜い男の子の笑い顔に思わず反応してしまうほど、高揚した気分を抱いていたから。
- ⑤ これからの任務に備え、完璧な忍者として、他人の醜い男の子にも自然に笑いかけるような健全な庶民になりきっていたから。

問4 傍線部(ウ)「こんな痛いような重量はかつて知らなかった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 手に食い込み痛みすら感じさせるほど重いということ。
- ② 遊びで盗むにはあまりにも高価であるということ。
- ③ 行為の意味を悟らせるだけの生々しさがあるということ。
- ④ 精神力を奪うほどの罪悪感を覚えさせられるということ。
- ⑤ もはや取り返しがつかないということ。

問5 空欄《 ー 》に入る最も適当な文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 電光石火の早業で、ペックはそれを買った物袋に落とし込んだ。
- ② 落ちつけ、とペックは自分に言い聞かせた。
- ③ 忍者は冷静に観察し、冷静に判断し、冷静に術をふるうのだ。
- ④ 突然、身に備わっていた筈はずの架空の幻術は消えてしまった。
- ⑤ 客の数に比べ店員数が少ないな、とペックは思った。

問6 傍線部(エ)「恐ろしい空白」とあるが、この時の「ペック」の心情説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 28。

- ① 自分が何をすればいいのか、判断ができず困惑している。
- ② 忍術がいきなり解けたことで、孤独を感じている。
- ③ 自分が罪を犯しそうな予感に、恐ろしさを感じている。
- ④ 犯罪を犯罪と思えなくなっていた自分に気づき、驚いている。
- ⑤ 白昼の犯罪行為が裁かれない事態に、怒りを感じている。

第3問 次の問いに答えよ。

(A) 次のA～Eの故事成語について、空欄 に当てはまる漢字一字を【語群】①～⑩のうちから選び、それぞれの故事成語の意味を【意

味】①～⑥の中から選べ。解答番号は 29 38。

A	「虎穴に入らずんば虎 <input type="text"/> 29 を得ず」	意味 <input type="text"/> 30
B	「捲土 <input type="text"/> 31 来」	意味 <input type="text"/> 32
C	「遼東の <input type="text"/> 33」	意味 <input type="text"/> 34
D	「水盆に返らず」	意味 <input type="text"/> 36
E	「 <input type="text"/> 37 に懲りて膾 <input type="text"/> 38 を吹く」	意味 <input type="text"/> 38

【語群】

- ① 重 ちゆう
- ② 軽 けい
- ③ 覆 ふく
- ④ 復 ふく
- ⑤ 餌 じ
- ⑥ 兎 じ
- ⑦ 羹 あつもの
- ⑧ 熱 ねつ
- ⑨ 豕 いのこ
- ⑩ 牛 うし

【意味】

- ① 失敗でひどい目に会って、用心をし過ぎること。
- ② 一度してしまったことは、取り返しがつかないこと。
- ③ 一度敗れた者が再び勢いを盛り返して、攻め寄せてくること。
- ④ 危険をおかさなければ、大きな成果は得られないこと。
- ⑤ 復讐のために、あらゆる苦労や悲しみに耐え忍ぶこと。
- ⑥ 独りよがりな思いこみ、他の考えを聞こうとしないこと。

(B) 次の文章は、二〇一三年に書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

お金はないのに高級車を買えた人、車がじゃんじゃん売れてウハウハだったディーラーに自動車メーカー、ローン債権を集めて金融商品をバカバカ作って売りさばき大儲けしていたウォール街の投資銀行、そしてその金融商品に投資することで老後の資金を効率的に増やしていた年金基金。みんなハッピーだった。リーマンブラザーズという巨大証券会社がコケるまでは……。

A

世界は、いまでもその後遺症を引きずったままだ。ギリシャからスペイン、さらにはイタリアへと、地滑りのように信用不安を拡大させるユーロ危機。日本の国で毎年積み上げられる借金も約一〇〇〇兆円に達し、そろそろ危ないといわれている。アメリカも、史上例を見ない長期の金融緩和策をとっているのに、なかなか経済が回復しない。といっている間に、そのアメリカにかわって世界経済を牽引してきた中国経済も、勢いを失いつつある。このような世界経済を見て、なぜ我々は今こそ「里山資本主義」ではないかと思つたのか。

B

現役時代に老後の備えを積んでおく年金の仕組みは、企業が想像を絶する成長を続ける中で拡大した、と書いた。企業や、国の経済が成長している間は、それがいいやり方なのだろう。右にならえで、みんなその仕組みをまねしていく。先進的な豊かさの仕組みに追いつき、仲間入りを果たした。だが、前提となる「成長」が止まったら、どうなってしまうのか。

案の定だった。実体経済の成長が頭打ちとなり、優良会社の株を買っておけば株価が上がり、どんどん資金が増やせる時代は終わりを告げた。それでも、みんながみんな、老後の備えを年金に頼ろうとした。なんとか予定通り増やしたい。その結果、うそで固められた高利回りの金融商品に、世界中の年金マネーが殺到する事態になった。

C

ユーロの中でも一番弱かったギリシャがまず血祭りにあげられた。破綻したギリシャの国民は、財政再建のために年金を切られることになった。国がこうした決定をこり押ししようとした時、広場で抗議の自殺をしたお年寄りが出たのは、記憶に新しい。

D

ここで注目すべきは「晴耕」である。この老人は、なぜ年金をもらわずに生きられるのか。簡単なことだ。お金のかかる生活をしていないから。自分で食べるものをできるだけ自分でまかなうから、買うものが少ない。現金による支出がほとんどないのだ。そういうとすぐに、「そんなのは無理だ、今の近代的な生活を送るには、お金が絶対必要だ」という反論が返ってくる。確かに一〇〇%は無理かもしれない。しかし、今支払っているものすべて、買わないといけないのだろうか。本当にその方が合理的で効率的なのか、と問いたいのだ。

E

今まで私たちは、そういう営みを「ちゃんとした経済」に入れてはいけなかった。または、思い込まされてきた。それに異を唱えようというのが「里山資本主義」である。

(藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義―日本経済は「安心の原理」で動く』による。一部改変。)

問 空欄 A E の中には、次の①～⑤のいずれかの文章が入る。最も適当なものを一つずつ選び、記号で答えよ。

解答番号は A 〓 39、B 〓 40、C 〓 41、D 〓 42、E 〓 43。

① 例えば、山あいの自然豊かな農村に暮らす人。ちよつと散歩をすれば、たきぎの四、五本拾うのは、それほど難しいことではない。過疎地と呼ばれる島に住む人。天気さえ良ければ、ちよつと釣り糸を垂れば、その日の夕食を飾るアジの一匹くらい、釣れるかもしれない。そうした恵みを受取る暮らしを、年金に頼る暮らしの「サブシステム」として組み込んでみてはどうだろうか。

② しかし、そもそも老後を豊かに暮らすためには、みんながみんな、例外なく、年金をもらうしかないのだろうか。「晴耕雨読」でいいではないか。晴れたら畑に出て、雨が降ったら、家でのんびり。年金の仕組みなど存在しない頃に考えられた、老後の理想的な生き方である。

③ そして(注1)リーマンショック後の世界経済の逆回転。死にそうになったウォール街や(注2)GMなどの企業を救い、経済を立て直そうと国が財政出動をした。借金を肩代わりしたのだ。結果、何が起きたか。肩代わりして「弱ってしまった国」が、今度はマネーの猛獣の餌食(えじき)になった。それが、ユーロ危機の本質である。

④ その瞬間、「まやかし」で固められた仕組みが、逆回転を始めた。世界経済が一気におかしくなったのも、二〇〇年の歴史を誇ったGMが経営破綻に追い込まれたのも、当然の帰結だった。魔法がとけてしまったのだ。

⑤ 一言で言えば、世界中の人がグローバルなマネーの恩恵にすぎない仕組みは、やはりおかしいからだ。少しでも切り崩し、「かたぎの経済」に変えられないかと。

(注) 1 リーマンショック——二〇〇八年九月十五日に、アメリカ合衆国の投資銀行であるリーマンブラザーズが破綻したことに端を発し

て、続発的に世界的金融危機が発生した事象の総称。

2 GM——ゼネラル・モーターズ (General Motors Company アメリカ合衆国の自動車メーカー) の略称。二〇〇九年六月に倒産、一時的に国有化され、二〇一三年十二月に国有化が終了した。

